

Hölderlin における生と死と自然（1）

—Hyperion についての一考察—

勝 田 秀 時

「人間における死とは何であるか？」我々人類に提起された、この問いかけの前で古来如何に多くの人々が立ちどまり、考え、論じ、そして苦悩してきたことであろうか！死の意義を正しく把握するためには、その対極としての生の本質を明らかにしなければならぬであろう。この生と死の問題の一つの捉え方として、ここに私は生の詩人、或いは愛の詩人といわれる F. Hölderlin の唯一の小説 *Hyperion* をとり上げ、彼の思想の一端に触れたいと思う。

「それは見るもほれほれさせられる眺めであった。もし母親が、私のいと子はどこなの？と甘ったるい声で尋ねると、すべての子供たちは彼女の膝にとびかかってゆき、一番幼い子供さえゆりかごから腕をさし出すように、生あるものはすべて、神々しい大気の中へ飛び出し、跳び上がり、またそうしようと努めた。かぶと虫やつばめや鳩やこうのとりたちは、狂喜して高く低く入り乱れて飛び回った。そして大地を飛び立てぬものは、足に羽が生えたように跳び上がった。馬は溝を跳び越え突進した。のろ鹿は垣根を越え、魚たちは海底から浮かび上がり海面から跳びはねた。母なる大気はすべてのものの心にしみ通った。そしてそれらを持ち上げ、惹きつけた。」 „Es war entzückend anzusehn! Wie, wenn die Mutter schmeichelnd fragt, wo um sie her ihr Liebstes sei, und alle Kinder in den Schoß ihr stürzen, und das Kleinste noch die Arme

aus der Wiege streckt, so flog und sprang und strebte jedes Leben in die göttliche Luft hinaus, und Käfer und Schwalben und Tauben und Störche tummelten sich in frohlockender Verwirrung unter einander in den Tiefen und Höhn, und was die Erde festhielt, dem ward zum Fluge der Schritt, über die Gräben brauste das Roß und über die Zäune das Reh, und aus dem Meergrund kamen die Fische herauf und hüpfen über die Fläche. Allen drang die mütterliche Luft ans Herz, und hob sie und zog sie zu sich.“¹

これは主人公 Hyperion が親友の Bellarmin にあててかいた書簡の一節である。行間に溢れる生命の息吹き！何という生の躍動であろう！また何という自然への深い愛であろう！生あるものすべてが Mutter なる大気, göttliche Luft のふところにとび込み, Luft はそれらを抱きよせる。即ち生あるもの (Leben) と自然 (Natur) とが, 愛 (Liebe) というつぼの中で熔け合い唯一にして永遠な, 灼熱する生命 (einiges, ewiges, glühendes Leben) と化する。この一切を包括する自然の生命の流れこそは, Hölderlin の目指す高次の全一的調和の世界とみなしてよいであろう。そしてこの世界の実現のためには, 手塚富雄氏の指摘のように,² 生命と愛という重要な二大要素が必要であるといえるであろう。

上に述べた自然の生命の流れは大きな環 (Sphäre) をなして回帰流動するのであるが, これについて Hyperion はいう。「血管は心臓で別れてまた心臓へ帰る。唯一にして永遠な, 灼熱する生命がすべてである。」³ また Hyperion にとって恋人であり, 理想の女性であった Diotima が, 彼にあてた最後の書簡の中で「生命の環」 „die Sphäre des Lebens“ について次のように述べていることは注目に値する。「...あらゆる思想よりも高い自然の生命を私は感じました。——たとえ私が植物になったとしても, 一体損失はそれ程大きいでしょうか?——私は存在するでしょう。どうして私は生命の環から消え失せることがあるでしょうか?そこでは, す

べてのものに共通であるところの永遠の愛が、万有を一つにまとめているのだが。 . . .」 „[...] ich hab es gefühlt, das Leben der Natur, das höher ist, denn alle Gedanken — wenn ich auch zur Pflanze würde, wäre denn der Schade so groß? — Ich werde sein. Wie sollt ich mich verlieren aus der Sphäre des Lebens, worin die ewige Liebe, die allen gemein ist, die Naturen alle zusammenhält? [...]“⁴ 死を前にしての彼女のこの書簡の一節は、Hölderlin の生と死の問題の核心に触れていることを我々は見落してはならぬだろう。

Diotima という一個の人間の小さな死が、自然の生の大きな環の中に没入することにより一つの存在と化するのである。即ち死によって一層 lebendig な生を獲得するのである。そしてその神々しい世界では、すべての存在が平等であり、しかも永遠の愛のきづなによって互いに親密に結び合い、一つの大きな生命の流れをなして流動するのである。これについて Diotima 自ら次のように述べている。「...自然の結合の中では誠実は夢ではありません。一層親密に結合するために、一層神々しく平和にすべてのものと、またお互いに結合するためにのみ私たちは別れるのです。私たちは生きるために死ぬのです。私は存在するでしょう。私は何になるかを尋ねません。存在すること、生きること、それで十分です。それは神々の名誉です。だから唯一つの生命であるところのすべてのものは、神々しい世界ではお互いに等しいのです。そしてその世界では主人も奴隷もないのです。自然の中の生あるすべてのものは、お互いに相愛の人々のように生活するのです。彼等はすべてのものを共通に持っています。精神も、喜びも、そして永遠の青春も。」⁵ 死をば、より高次の生に至る門であるとみなし、生死を含めた一切を無限の生命の流れと見るこの Hölderlin の汎神論的世界観は、J. G. Fichte (1762~1814) からの影響を強く受けているのではなからうか? 即ち Fichte はその著「人間の使命」 „Die Bestimmung des Menschen“ の中で次のように述べている。「自然における

あらゆる死は出生であり、死することにおいて、まさに生の昂揚が明らかに現われる。自然には死の原理はない。なぜなら自然はただもう徹頭徹尾生であるからである。死が殺すのではない。老いた生のうしろに隠されていた一層生ある生が、始まり展開することによって殺すのである。死と出生とは、生が愈々一層光明に充ち、自己自身に愈々一層似て、顕われんがために、生が自己自身となす格闘に過ぎない... 自然は私を殺す、それ故にこそ自然は私を新しく生かさねばならない。私の現在の生はただ、自然の中で展開しつつある私のより高い生の前で消失し得るのみである。」⁶

生に対するこの死の意義について、次に述べる Lawrence Ryan の見解は当を得たものといえるであろう。即ち「Diotima はただ来るべき地上の Olympos の画だけを画いているのではなく、彼女は更にまた独自の死、いやむしろ死一般の存在 (本質) (das Wesen des Todes überhaupt) に関して自分の考えを述べている。そして死の、めでたく喜ばしい肯定を、ついには Hyperion の「来るべき美」 „künftige Schöne“ の予言的な暗示に通じるところの、人間の生命の一つの意識的意味 (Sinndeutung) に飛躍的に導くのである。(中略) 何はさておき次のことが目立つ。即ち Diotima が彼女の来るべき死をば殆んど凱歌と見なし、人間の手によって作られたすべてのつぎはぎ細工を超えた、勝ち誇った到達点と見なすこと。簡単にいえば非存在としてではなく、存在と見なすことが目立つのである... 彼女は「生命の環」から自分を見失うのではなくて、いわば世界の中へ没入するであろうということを知っている。というのは彼女の死の必然性の意識は、「自然の生命」の全体への意識の編入についての確信と結びついている。即ち彼女にとってはその死は、上にかぶさる過程での (in einem übergreifenden Prozeß) 個別的な契機になり、自らを再生 (回復) させるところの合一 (Einigkeit) への過程になる。従ってそれは、すべての存在を結びつけているところの結合体 (Bund) の入手に役立つが、Bund の解体に役立つのではない。」⁷

Diotima を通して知り得る限りでの Hölderlin によれば、この世での死によって我々は自然の生命と合一し、即ち神々の世界の一員として編入されるのである。そして Diotima のいうように「…長老の王座のまわりの堅琴弾きのように、私たちは世界の静かな神々のまわりに、私たち自身も神々しく生活する。…」⁸ のである。そしてこの神々の世界では、すでに述べた Diotima の言葉にあるように、すべてのものが等しくどのような対立も存在しないのである。Hyperion から Bellarmin にあてた第二の書簡の中での、この世界についての次の描写は特に格調高く優れたものであるといえるのではなからうか。「すべてのものと一つになること、それは神性に満ちた生活 (Leben der Gottheit) である。それは人間の至福の世界 (der Himmel des Menschen) である。生あるすべてのものと一つになること、至福な自己忘却の中で自然の一切の中へ帰って行くこと、それは思いと喜びの絶頂である。それは神聖な山頂であり、永遠の休息の場所である。そしてそこでは真昼はそのむし暑さを失い、雷はその雷鳴を失いそして荒れ狂う海は麦畑の穂波に等しくなるのです。生あるすべてのものと一つになること！この言葉と共に道徳はその怒れる鎧かぶとを、人間の理知はその王笏を捨てる。そしてすべての思いは、永遠に一なる世界のすがたの前に消え失せる。それはちょうど苦闘する芸術家の諸法則が女神ウラニアの前に消え失せるようなものです。そして峻厳な運命はその支配権を断念し、すべてのものの結合によって死は消え失せ、統一と永遠の青春が世界を幸福にし美しくするのです。」⁹ 死をも含めてすべてのものが一つとなって帰って行く自然 (Natur) について、Hölderlin が意味するところのものを今少し詳しく考察するとしてよう。

小牧健夫氏によれば、*Hyperion* における自然とは「原因と結果、数と量とに一切を還元し得られる関係体系として科学的に説明されない。ただ信頼し、愛し、帰依することによってのみ自然の生命に帰入し、これと合一することができる。自然の最も深い内奥を人間は知的に把握することは

できない。」¹⁰ ものなのである。また「自然はもはやただ魂の避難所、休息所である慈愛深い姿としてでなく、人間が否応なしに当面して、自己に及ぼす力をぜひと認めなければならないより大きな連関、秩序として見られてきたのである。人間が人間以上のものに対する態度に、親愛の感情を基調とするいわば芸術的な態度と、畏敬の念を基調とするいわば宗教的な態度との二つが見られるとすれば、Hölderlin のこの自然観の発展は、芸術的態度から宗教的態度への移り行きとして認めることができる。即ち自然が美の面よりむしろ聖の面において見られてきた。」¹¹ と述べられているように、*Hyperion* における自然は、それ以前の作品におけるものとは異って、帰依礼拝の対象として把握されるに至ったことを示している。R. Guardini はこの自然の性格について、その著 *Hölderlin* の中で次のように述べている。「自然は存在の大きな統一体 (die große Einheit des Seins) である。その現象は *Hyperion* において、空間的・時間的距離によってと同様に、存在するものの多様さによって離れて横たわっている。それにもかかわらず自然は一つの全体を形成する。自然は全体である。自然の外には何物もない。確かに個々の実在するものは、何度もくり返し取り出され自然に対立させられる。．．．しかしその分離はただ一時的なものである。一つの形態、一つの経過が全体から自分を目立たせ、それから再び豊富な自己規定に満たされ、全体に編入されるのである。神々もまた自然に対立させられる。．．．しかし神々は、自然そのものおよび自然の色々な本質の側面の聖なる啓示を形成するということが、直ぐ明らかになるのである。」「自然の全にして一なるもの (die All-Einheit) は göttlich である。それはすでに Lebendigkeit という概念において明らかである。そしてその概念は、何度もくり返し Lebendigkeit に順序よくつけ足されるのだが、この All-Lebendigkeit は、植物や動物について、岩石との相違において述べられるところの Lebendigkeit 以上のものである。川の流れも lebendig であり、海も、島々も、山脈も、陸地も、そして天体もそうな

のである。…この Lebendigkeit において死もまた拾い上げられているのである。Lebendigkeit によって個別的な生並びに死も、異ってはいるがしかし全体と同化する要素を形成するのである。」「Hölderlin にとっては世界から解放された Göttlichkeit が存在するのではなくて、ただ世界そのものの Göttlichkeit だけが存在するのである。神々は自然の中において存在する。神々は存在するものの本質であり、現存在の具象的な特殊化したものなのである。」¹² Guardini のこの格調高い見解は、Hölderlin の Natur の本質に迫る、鋭い洞察によるものであるということができよう。すべての存在が合一する自然、生そのもの、All-Lebendigkeit、いわば根源的生である自然は、先に述べたように「生命の環」となって流動し回帰するのである。

☆

☆

ここで私はこの流動、回帰という観点から自然を今一度見直し、仏教の輪廻の思想や Nietzsche の永遠回帰との関係にも触れてみたい。

周知のごとく、歴史上始めて万物流転の説をといたのは、ギリシアのヘラクレイトスだとされている。彼は万物を河の流れにたとえ、常に生成変化し流動するものとした。しかし彼はこの万物流転の中に永久不変の法則が存在すると主張したのである。

小牧健夫氏の指摘にあるように「万象流転を説いたヘラクレイトスが万象のうちに法 (nomos)、理 (logos) の恒常不変を信じたように、Hölderlin は流れる自然のうちに永遠なものを観じていた。それは万有の根源である愛を原理とする生命といってもよいであろう。」「Hölderlin が自然を流動の相において見たということは自然の絶対性、恒常性を否定したことではない。もし彼が現象の無常な転変をのみ見ていたとすれば、そうした空観からどうしてあのような熱烈な自然帰依が生れたらだろうか。見るところ神でないものがない彼の宇宙は絶対な永遠の実在であった。」¹³のである。この自然の流動性、回帰性（循環性）については、Hyperion の中の、

前の敘述および次の敘述がそれを立証していると解すべきであろう。「なお私はすばやくのがれ行く生のすべてから (von all dem fliehenden Leben) できるだけものを自分に取りこみたいと思った。…」¹⁴「…すべてのものは老いて再び若返る。何故我々は自然の美しい循環から除かれているのか？ 或いはそれは我々にも適用されるのか？」¹⁵「…私はいつか再びあなたにめぐりあうために、何千年もの間星たちの間をさすらうであろう。ありとあらゆる形に自分を包み、生命のあらゆる言葉を語りながら。…」
„Ich würde Jahrtausende lang die Sterne durchwandern, in alle Formen mich Kleiden, in alle Sprachen des Lebens, um dir Einmal wieder zu begegnen. […]“¹⁶「…生の一つ一つの呼吸が我々の心にとっていつまでも貴重であるからだ。純粋な自然のすべての変化もまた自然の美に属するからだ。我々の魂がもし、はかない経験を脇に置き、ただ聖なる休息のみ生きるならば、それは葉のない木のようなものではないだろうか？…」¹⁷「人間たちは腐った果実のようにお前から落ちて行く。おお、彼等が没落して行くのにまかせよ。そうすれば彼等はお前の根に帰って来る。そして私は、おお、生命の樹よ、私は再びお前と共に青々とし、すべてのお前の芽をふく枝々と共に、お前の梢のまわりに息づくことになるように！…」¹⁸

以上に述べてきたことを要約すれば——自然の生命から生れてきたあらゆる存在（無生物をも含む）は、やがてそれぞれの死によって再び自然の生命に帰って行く。即ち死によってすべてのものが一つになって全体を形成し、そしてそれが流動しつつあらゆる存在の第二の誕生を準備する。かくしてあらゆる存在が前回とは異なった形で自然の生命から生れるのである。このような生と死のくり返しが大きな生命の環を循環しつつ行なわれるのである。このように理解してきたとき、Hölderlin の *Hyperion* における自然観は、次の諸点で仏教的な色彩をおびているといえないだろうか。即ち第 1 に礼拝の対象が神と仏という差違こそあれ、人間は精進次第

によっては死後、その対象になり得るのではないか？また自然界の存在の一つ一つの中に神の心或いは仏の心を見出そうとする、根源的のヒューマニズムを基調とする汎神論的な立場をとる点で、第2に死後の世界の様相が、一方では永遠の愛の下に存在するものすべてが互いに親密に結びあっているのに対し、他方は邪執、謬見、諸煩惱、悪業により迷う衆生が三界（欲界、色界、無色界）六道（地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道）で無数の苦悩を受けるといった著しい違いはあるにしても、生と死を永遠にくり返して行く（仏教においては輪廻転生という）という点で。

次に Hölderlin の回帰思想を Nietzsche の永遠回帰（永劫回帰，die ewige Wiederkunft）と比較してみよう。信太正三氏によれば「永遠回帰の思想、詳しくいえば、同じものの永遠回帰の思想は、存在するものすべての無意味、無目標、無終末なる同一的反復の無限性、即ちありて在るもの一切の虚無性における終りなき現存の無限性、無の永遠性が、そこに示されている。」¹⁹ Nietzsche の最高著作 *Also sprach Zarathustra* の中心思想である永遠回帰は、次の三つの象面を持っていると信太氏は指摘している。「一つは、人間の生をも過去、現在、未来の永却にわたって包括する存在の永遠なる同一的回帰という存在論的（或いは宇宙論的）な象面。二つは、この回帰の生と存在の全体を無限回にわたって反復肯定することを汝は欲するかどうかという実存論的な象面。三つは、これら存在の回帰の必然と実存の決断反復の自由というヤヌスの両相面をおしつむ深い虚無の象面である。虚無を包括的な無の場とした存在の必然と実存の自由との矛盾的対立の緊張、これが永遠回帰の意味論的な構造なのである。まず人間にとっての無の場として見れば、永遠回帰はニヒリズムの極限的形式（die extremste Form des Nihilismus）である。（中略）永遠回帰が『深淵の思想』（der abgründliche Gedanke）であるというのは、それが存在の自重としての虚無の深淵と同時に存在の深淵そのものを映現しているからでなければならない。…ニーチェにおける実存の根拠喪失というニヒリズムの

怖るべき深淵性は、『神の死』から口を開く存在そのものの深淵 (Abgrund) と見合うもの、これを内面的に映発せしめたものである。この存在の深淵がみずからを開示するその根原言語、これが永遠回帰の思想なのである。』²⁰ また秋山英夫氏は、永遠回帰は Nietzsche のディオニュソス的世界に外ならぬと、次のように述べている。「永遠回帰、一切のものがそのままの姿で不可避的に回帰して、無に帰するフィナーレもないということは、そのままニーチェのディオニュソス的世界にほかならない。始めなく終りなき世界、支出もなければ収入もない世界、永遠に変化し、永遠に還流し、巨大な回帰の歳月をもち、形態作成の干潮と満潮をもった力の大海であり、いかなる飽満も倦怠も疲労も知らぬ生成そのものなる世界、永遠の自己創造と永遠の自己破壊という二重の快樂をもったディオニュソス的世界。ディオニュソスはニーチェにおける絶対肯定の法式にほかならない。ディオニュソスの秘義は生の永遠の回帰である。』²¹ このように見てきたとき、Hölderlin と Nietzsche の円環的世界観は、永遠回帰的という形式面において類似しているが、実質的には大ざっぱにいて一方はアポロ的、他方はディオニュソス的といえる程の差異が認められるのではなからうか。異なるものの永遠回帰と同じもののそれ。片や神を礼拝し、片や神を徹底的に否定する。この余りにも対照的な両者の間に、上述の世界観における形式面を除いて、思想全般にわたって果してどれ程の親近性が認められるであろうか？

Eick, Hugo は論文 *Ein Vorspiel Zarathustras, Über Hölderlins Hyperion'* において、両者の親近性について次のように述べている。

「*Hyperion* は *Zarathustra* の 85 年前に現われたけれども、非常に強く *Zarathustra* の前奏曲と見なされ得るので、それは文学の低地の間にあって、時宜を得ない作品に対して孤立してそびえ立っている。勿論 Nietzsche の場合、先づ第一に、その独断即ち彼の論理的に公式化された結果の総計を考える人は誰でも、*Hyperion* においてそれに対する萌芽をのみ

見出すであろう。両方の作品において、それらの根源の層の深さ、即ちリズムの緊張と言語の性格において表現された *Gesinnung* の類似性、どこか他のところでは殆んど届かない、詩の灼熱する本質の光りの強さは、益々同じように現われるのである。Hölderlin の場合、Nietzsche の怒っているような男らしさに比較して、すべてのものが一層もの柔らかかで、ためらい勝ちで、本当に無邪気に見えるならば、正にそのことによって *Zarathustra* は、恰も大人の顔が子供のときの 特長をふり返ってつかむことによって、やっと明らかになるのと同じ意味で理解されるのである。実際しばしば大人の顔のひねくれたしわの形の中で、遠い少年時代を透視した特長だけが最も深いもの、最も高貴なもの、そして宥和的なものである。」²² また「…しかしそれは Hölderlin において、さすらう金色の雲の峰になり、そして Nietzsche の場合には雷雲として稲妻を放つところの同じ空気である。…」²² と述べて両者は同じ Romantik の地盤の上に立ち 霊感の強さと感動させる力は共通であることを強調している。更にまた両者の関係を次のような言葉で表現している。「*Zarathustra* の怒る言葉の中にただ破壊の打撃をのみ聞きとる人は誰でも、その作品がどんな繊細な芽から成長したかを殆んど意識しない。…この傍若無人な攻撃の全爆発は、殆んど女性のようにおののく一つの心の傷つき易い感受性、感じ易さなくしては生じ得なかったであろう。（中略）*Hyperion* 全体はためらう憧れの一つの歌である。そしてそれはゆっくりとふくれ上りながら、二つの体験（友情と愛）で高まりながら、そして地上的なものから益々解放されながら 休らぎの光の海へ注ぐ。Adamas — Alabanda — Diotima、即ち三つの青くきらめく大波の上のしぶきの峰。この形態の中で彼の憧れは画になった。しかしそれらの後ろには、人間たちがただそれへの回り道に過ぎなかったところの、一つの相当深い理想があった。即ち『それが世を去ったのは数年来初めてではなかった。いつそれが存在したか？いつそれが遠去ったか？をそんなに正確には言い得ない。しかしそ

れは存在した。それは存在している。汝の中に存在している。』 Zarathustra の心の中に同じ憧れがのたうってはいないか?... 彼の『自由な精神の持主たち』と友人たちを自分のために見つけ出さねばならなかったところの同じ Nietzsche が、彼の憧れの最高の目標として超人 (Übermensch) を創造した...』²²

浅井真男氏もその論文「ヘルデルリンにおける悲劇性」の中で、この問題に触れて次のように述べている。「...『一切は再帰するのだ。そして起るべき事柄は既に完成されているのだ。』(『エトナ山上のエムペドクレス』) 殆んど一世紀後にニーチェはあらゆる主知主義的懐疑の真只中から殆んど暴力的に、人生の最後の意味づけとして『永恒回帰』の理念を掲げた。それは飽くまでも、『一切にも拘らざる』、意志的な生肯定の方式であった。ヘルデルリンにあって生肯定は意志の課題ではなく、存在に関する素朴な信仰であった。ニーチェにあって自己超克の仕事であったものは比処では自己保存の事柄であった。けれども広く文化的に言えば、両者の帰結は北方人的な観念論から南方的な存在への帰依であった。その名がヘラクレスを以て呼ばれようと、エムペドクレスを以て呼ばれようと、彼等が故郷として帰ったところは、異教的、一如的な、同時に肉体と精神とのエレメントなる自然であった。彼等はそれを、人間の運命も社会の成行も、個人の禍福と意欲もすべてそこからのみ発しそこへのみ帰著するところのものとして、全的に肯定せざるを得なかったのである。』²³

以上のように Hölderlin と Nietzsche との類似性を、E. Hugo の場合は靈感の強さ、Gesinnung、そして詩の本質において、浅井氏の場合は生肯定、存在への帰依という面で強調しているが、私はそれらの論旨に対し、全面的に賛同を示すにはまだ一抹の不安を覚えるものである。しかしその不安については稿を改めて述べることにし、ここでは一つの問題提起の範囲にとどめておくことにする。

これを要するに Hölderlin の *Hyperion* における自然は、生あるすべ

てのものを一つに同化し永遠に流動する生命の流れである。それは無限に生死をくり返すという点で、仏教における輪廻の思想を思わせ、生肯定という面でニーチェの永遠回帰と親近性をもつ。また生の自然は愛に満たされた、göttlichにして自由かつ平等な世界であり、死をも一つの存在としてその中に包括し新しいよみがえりに向うところの全的な存在なのである。Diotima のいう如く、「死がなければ生はない。」²⁴ 「死は生の先触れ」²⁵ なのである。死は大いなる自然の生、即ち全一的調和の世界にあずかるための一つの契機なのである。

Text

F. Hölderlin : Sämtliche Werke 3 *Hyperion*, hrsg. von F. Beißner
(Hölderlin. Kleine Stuttgarter Ausgabe 1965)

注

- 1 Text, s.51~52.
- 2 国松孝二編『ドイツ文学における伝統と革新』筑摩書房 1965 7頁.
- 3 Text, s. 166.
- 4 Text, s. 154.
- 5 Text, s. 154.
- 6 フィヒテ著、宮崎洋三訳『人間の使命』岩波文庫 1939 238~239頁.
- 7 Lawrence Ryan Hölderlins *Hyperion* exzentrische Bahn und Dichterberuf, (1965.) s. 194—195.
- 8 Text, s. 154.
- 9 Text, s. 9.
- 10 小牧健夫『ヘルダーリン研究』白水社 1953 33頁.
- 11 同 上 37頁.
- 12 Romano Guardini : *Hölderlin*, Weltbild und Frömmigkeit Kösel 1955
s. 408, 410, 412
- 13 小牧健夫『ヘルダーリン研究』322頁.
- 14 Text, s. 25.
- 15 Text, s. 18.
- 16 Text, s. 127.
- 17 Text, s. 107.

- 18 Text s. 166.
- 19 信太正三『永遠回帰と遊戯の哲学——ニーチェにおける無限革命の論理——』勁草書房 1969 118頁.
- 20 信太正三『永遠回帰と遊戯の哲学——ニーチェにおける無限革命の論理——』勁草書房 1969 118頁, 120頁
- 21 秋山英夫『文学的ニーチェ像—ニーチェと詩人たち—』勁草書房 1969 186頁
- 22 Eick. Hugo: Ein Vorspiel *Zarathustras* Über Hölderlins *Hyperion* Österreichische Rundschau 18 (1909) s. 225~226
- 23 日本独文学会編『ドイツ文学における悲劇性とその超克』郁文堂 1949 96頁
- 24 Text, s. 156
- 25 Text, s. 33
- ☆ (引用符なしのイタリックは作品名を示すものとする)

Leben, Tod und Natur bei Hölderlin (1)

—Eine Betrachtung über *Hyperion*—

Hideji Katsuda

Die Natur in Hölderlins *Hyperion* ist ein großer Strom des Lebens, der Eines mit Allem ist, was lebt, und in alle Ewigkeit fließt. Der Strom erinnert einen vielleicht an die Lehre von der Seelenwanderung im Buddhismus, weil er Leben und Tod für immer wiederholt. Zwischen dem Gedanken und der ewigen Wiederkunft des Gleichen bei Nietzsche wird vielleicht eine gewisse Verwandtschaft bestehen in Hinsicht auf die Lebensbejahung.

Die Natur ist mit Lebendigkeit und Liebe erfüllt, sie ist die göttliche Welt, in der Alles Freiheit und Gleichheit hat. Die Natur des Lebens ist das Ganze, das auch das Sterben, als ein Dasein, in sich faßt. Diotima sagt, „Ohne Tod ist kein Leben“, „Der Tod ist ein Bote des Lebens.“ Das Sterben ist ein Moment für die Teilnahme an dem Leben der Natur.